

第105回 ハワイアン・ブームの変遷と 昭和歌謡への貢献

半年後に迫った東京オリンピックですが、昭和39年に開催された前回大会の「時代と世相」を振り返る番組では、『東京五輪音頭』が当時の代表曲のように流され紹介されます。

しかし、東京五輪を挟んだ昭和39年と40年の2年間を振り返ってみると、私がラジオ・テレビを通じて「いちばん耳にしたなあ」と実感するのは『お座敷小唄』と『女心の唄』でした。歌っていたマヒナスターズ、バーブ佐竹は、どちらもハワイアン出身であり、そこには戦後の大衆音楽を俯瞰してみたときに見えてくる嗜好の変化がありました。

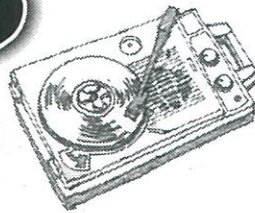
戦時中、洋楽を遮断されていた若者たちは、終戦直後から堰を切ったように上陸してきた米国経由の大衆音楽に飛びつきます。ラテン音楽、ジャズ、ウエスタン、そしてハワイアンなど、大学のキャンパスからは各ジャンルにわたって雨後の筍のごとくバンドが生まれます。中でも「夢のハワイ」の世界に浸れるハワイアンは当時の学生たちにとって魅力あ

ふれる音楽でした。早大の「ナレオ・ハワイアンズ」は終戦翌年の昭和21年に発足、慶大

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



では同29年に「カルア・アイランダーズ」、中央大では「ルナ・ハワイアン（昭和30年前後には高木ブーが所属）」が誕生。これらのサークルは現在もブラックミュージックなどを中心に活動していますが、サークル名には「ナレオ」「カルア」「ルナ」の名が残されています。その昔、こうした学生バンドの司会を担っていたのが露木茂、森本毅郎など、のちにアナウンサーとして名を成す人たちでした。

ハワイ語はもちろん、アイランドやパラダイスといった南洋諸島を想起させるような名のバンド名は学生バンドに限りません。

バックキー白片とアロハ・ハワイアンズに在籍していた和田弘は、昭和29年に独立、ハワイ語で「月」を表わすマヒナと「星（スター）」をバンド名にしたマヒナスターズを結成します。マヒナの最大の特徴である和田弘のスティールギター、佐々木敢一の裏声とウクレレは、本来ハワイアンのためのものでした。

スリッパ片手に



「ローハイド」を歌うことで人気があった伊藤素道とリリオ・リズム・エアーズの前身は、「リリオ・ハワイアンズ」というハワイアンバンドでしたし、ダニー飯田とパラダイス・キングも昭和30年の発足時は「パラダイス・ハーモニー」という名のハワイアン中心のバンドでした。

昭和30年代に入り洋楽のジャンルがさらに広がり、歌謡曲人気も高まっていく中、ハワイアンへの注目はしだいに薄れ、東京五輪開催の昭和39年頃には人気も下降線となりました。そうした時期に、ハワイアン出身のマヒナやバーブ佐竹が歌謡曲のジャンルで大ヒットを記録するというのも大衆音楽の移ろいを象徴した出来事だったのでしょう。

結果として、ハワイアン人気の翳りが人材を歌謡界へと送り込む状況を生み、昭和歌謡をよりバラエティーに富む世界にしてくれました。常夏の島ハワイでは涼風を呼ぶスティールギターの音色と裏声を、見事に変身させたマヒナの功績を忘れてはいけませんね。

ほりい・るくろろ 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私の「昭和大衆歌謡考」第4集「しあわせになろうね」』（グスコー出版）が好評発売中